大学生の学習行動と自己決定
-学びを通じた職業展望の明瞭さの観点から-

半澤礼之
(京都大学高等教育研究開発推進センター)

問題と目的
大学での学びと将来の職業を結び付けたいと考える大学生の存在が指摘されていることや(半澤・坂井,2005;武内・谷田川・伊藤,2005),大学生の成長にとって大学での学びが重要な意味を持つことが指摘されていることから(橋上,2009),現代の大学生のキャリア形成を理解する上で,大学での学びは非常に重要な意味を持つと考えられる。この,大学での学びを将来の職業と結び付けたいという意識については,明確な将来展望・職業展望を持つものから,そのような展望がない学校から社会への移行期を過ごす場としての大学に対する漠然とした期待に基づくものまで様々であると考えられる(半澤,2010)。このような意識の違いは,実際の学習行動や,自分のことを主体的に決めるという自己決定の違いとして表れてくると考えられる。そこで本研究では,大学での学びを将来の職業と結び付けたいと考えている程度と,現実の結びつきの認識,そして職業展望の明瞭さによって大学生を分類し,その分類によって彼らの学習行動や自己決定欲求に違いがみられるかどうかを検討することを目的とする。

方法
調査対象者: 近畿地区の四年制大学2校に所属する大学生460名(男性193名,女性267名)。平均年齢20.2歳(\textit{SD}=1.15)。
調査時期: 2010年7月〜9月
調査項目: (1)学業と職業の接続意識尺度(半澤・坂井,2005,2009)より学業と職業の接続を理想としているかどうかを問う因子である「接続理想」と,学業と職業が現実に接続していると認識しているかを問う因子である「接続認識」, (2)職業レディネス(下村・塩,1994)より,職業展望の明瞭さを問う因子である「明瞭性」, (3)自己性・欲求尺度(安藤,2003)より,自分のことは決めたいと思っている等を問う因子である「自己性決定」 (4)大学生の授業における積極的な学習行動を問う「プロセス・パフォーマンス(畠野,2010)」いずれも5点法で尋ねた。

結果と考察
尺度の構成
本研究で使用する尺度は既存の尺度であるため, \( \alpha \)係数を算出してその値が十分であれば元尺度の構成を用いることとした。その結果, 「接続理想」 \( \alpha = .88 \), 「接続認識」 \( \alpha = .85 \), 「明瞭性」 \( \alpha = .85 \), 「自己性決定」 \( \alpha = .78 \), 「プロセス・パフォーマンス」 \( \alpha = .87 \) であった。この結果から, 本研究では元尺度の構成を
そのまま用いることとした。

調査対象者の分類
「接続理想」「接続認識」「明瞭性」の合計得点を標準化したものを使ってクラスター分析(Ward法)を行った。各クラスターの人数や解釈可能性などを考慮し、4クラスターを抽出することとした(Figure1)。

各クラスターの特徴に基づいて、第1クラスターを「職業展望探索群(N=229)」、第2クラスターを「理想-現実不一致群(N=64)」、第3クラスターを「理想-現実一致群(N=79)」、第4クラスターを「職業展望不明瞭群(N=81)」と名付けた。

群による学習行動と自己決定欲求の差
群を独立変数、プロセス・パフォーマンスと自己決定欲求を従属変数とした一要因の分散分析(多重比較Tukey法)をおこなった。その結果をTable1に示す。

Table1.群によるプロセス・パフォーマンスと自己決定欲求の差

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>1.職業展望探索群</th>
<th>2.理想-現実不一致群</th>
<th>3.理想-現実一致群</th>
<th>4.職業展望不明瞭群</th>
<th>F値</th>
<th>多重比較</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>プロセス・パフォーマンス</td>
<td>3.19</td>
<td>3.04</td>
<td>3.54</td>
<td>2.77</td>
<td>15.14</td>
<td>***3&gt;1,2,4;1&gt;4</td>
</tr>
<tr>
<td>自己決定欲求</td>
<td>3.67</td>
<td>3.98</td>
<td>4.11</td>
<td>3.77</td>
<td>13.82</td>
<td>***3&gt;1,4;2&gt;1</td>
</tr>
</tbody>
</table>

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

群間の比較の結果、プロセス・パフォーマンスと自己決定欲求のいずれも、群による違いがあることが明らかになった。どちらも、職業展望が明確で、大学での学びを将来と結び付けて考えており、かつそれが現実にも結び付いていると認識している理想-現実一致群の得点が高いという結果であった。この結果から、学びを通じた将来展望について、その展望の仕方によって実際の学習行動などに違いがみられることが明らかになったといえる。

(Reino HANZAWA)